

第 3 分 科 会

不安な表情の多い高齢者への関わり

特別養護老人ホームにおける介護実践より

三重県 津市

とくべつようごろうじん ほうとくえん
特別養護老人ホーム 報徳園

ちかざわ あかり
介護職員・近澤 明莉

共同研究者 千草篤麿、今田、大倉、福永

寺井、佐々木、千草福、出馬、飯坂、達

E-mail:chikusa@houtokuen.jp Tel:059-228-1951 Fax:059-228-1952

今回の発表の施設 またはサービスの 概要

津市は三重県の県庁所在地で、人口27万5千人の中都市である。津市老人福祉施設協会会員数は現在37施設である。本園は昭和56年開設の特別養護老人ホームで、定員110人の他にショートステイ15人、認知症対応型デイサービス1単位（12人）を運営している。

【取り組んだ課題】

・特別養護老人ホームでは、情動障害によってコミュニケーションがスムーズにとれない高齢者が少なくない。そのような高齢者に対し、介護職員が充分に本人の意図を理解できず、対応に支障をきたす場面が時として認められる。結果として、介護職員が情動障害のある高齢者に接する時間が短くなり、ますます本人のニーズが把握されにくくなる。介護職員の役割は、対象者に対する心身のケアであるが、特に心のケアを考える時、情動障害のある高齢者への取り組みは重要であると考えます。

・情動障害のある高齢者が不安になったり泣いたりする要因を理解し、少しでも不安な表情を減らしていくことを課題として取り組みを行った。

【具体的な取り組み】

・Aさんは90歳女性で、脳梗塞後遺症による認知症、失語症、右片麻痺がある。ADLはほぼ全介助であるが、食事は少し介助があれば、自力摂取が可能である。

・Aさんはいつも不安そうな表情や険しい表情や、泣いている場面を見かけることが多く、突発的に大声で泣き出すことがあった。しかし、日常的なことだと考えてしまい、泣いている理由を追求せず、本人を理解しようとしなかった。また、失語症があるため他者との交流が少なく、笑顔もほとんど見ることができない状態であった。

・情動が起きる原因を把握するため、不安場面などでその理由を推測したり、本人に尋ねたりし、いつ、どこで、どのような場面で、どのくらい泣いていたのか、どうして泣いているのか等を、10人の職員がその都度1冊のノートへ記入していくこととした。

・また、日常的なケース記録や家族からの聞き取りも含めて結果を分析し、不安を軽減するための介護の方法等について検討した。なお、この取り組みは2019年7月及び10月～12月に実施した。

【活動の成果と評価】

・4月から夏頃までは大声で泣き叫ぶ行動が目立っていたが、7月以降課題を設定し、様々な角度からどうして泣いているのかの質問や、声掛けを行った。

・「泣く」場面の状況としては、「話しかけられた時」、「状況が変化した時」、「一人でいた時」が多く、「笑う」場面の状況としては、「気持ちが一致した時」、「褒められた時」が多かった。

・10月頃には泣いていることがとても少なくなり、泣いている時もただ大声で泣くのではなく、職員の顔をしっかりと見て、何かを訴えかけるように泣くようになった。「泣く」以外にも自分の意思を強く示すような行動も見られ、怒りや拒否、不快という感情も出せるようになった。職員との距離も少しずつ近づいているのか、発語やはにかんだ笑顔も多くみられるようになり、調子がいいと「ありがとう」等も出るようにまで変化が見られた。

・この取り組みを通して、感情表現や発語の乏しい高齢者に対し、苦手意識を持つことや「できないだろう」「この方はこういう人」と決めつけをせず、様々な角度や方法でアプローチを行い、相手を理解していくことの重要性が明らかとなった。

【今後の課題】

・事例対象者であるAさんは、その後永眠されたため取り組みは終了した。しかし、Aさん同様に感情表現や発語の乏しい他の高齢者の介護をする際に、今回の成果を参考として、広く活かしていくことが今後の課題である。

【参考資料など】

千草篤麿・近澤明莉（2020）「不安な表情の多い高齢者への介護福祉士の関わり」『高田短期大学介護・福祉研究』第6号 pp. 1-11.

